

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 16 日現在

機関番号：33801

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2011～2016

課題番号：23500706

研究課題名(和文) 徳川政権における幕閣の武芸思想と武芸政策に関する文献学的研究

研究課題名(英文) A philological study on martial arts thought and military arts policy of the Tokugawa shogunate cabinet ministers in the Tokugawa Administration

研究代表者

菊本 智之 (KIKUMOTO, Tomoyuki)

常葉大学・健康プロデュース学部・教授

研究者番号：70267847

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：近世武芸の研究の多くは、武芸・武術の名人・達人に着目するものが多い。しかし、軍事政権でありながら200年以上戦乱のない時代の中で、武芸界や武士階級に最も影響を与えたのは、武芸政策に影響をもった為政者である。

近世武芸の一側面として、直接的な軍事力以上に、天地万物の理に適った技の追求の姿勢と修得の過程が、高度な技の発現だけでなく、広く社会や政治を高度に処していくに通ずるという認識が見られた。特に、徳川吉宗の血統を受け継ぐ人物の中に、幕政において重要な役割を果たした人物があり、これらの人物が家伝の武芸を重視し、そこで培った武芸思想に基づいた施政方針や政治思想を展開していたことが窺えた。

研究成果の概要(英文)：Most of studies of early modern times martial arts pay their attention to an expert and a master of martial arts. However, it is an administrator to have affected the martial arts world and the bushi-class in the times without the war more than 200 years while being a military regime.

Recognition to know what a posture of the investigation of skill that met the law of nature of universe and a process of the acquirement sentenced society and politics to highly was seen in martial arts than direct military ability in the early modern times. Particularly, a person who inherited lineage of Tokugawa Yoshimune played an important role in the Tokugawa shogunate after the middle in the early modern times. These people made much of martial arts of the family lore, and it was indicated to have developed an administrative policy and politics thought based on the martial arts thought cultivated there.

研究分野：武道論

キーワード：武芸思想 武芸実践 武芸政策 徳川政権 幕閣

1. 研究開始当初の背景

(1) これまでの近世における武芸研究は、いわゆる武芸の名人・達人と呼ばれる特定の人物の思想や理論、武芸流派の特徴や側面などが取り上げられてきたが、それが当時の武芸界全体の傾向や様相であるかのように扱われたり、ある一時期の様相や傾向が、265年という長い徳川政権時代を通して続いていたかのように捉えられてしまう恐れもあった。そして、そこで明らかになるものは、名人・達人たちの優れた武芸観や技術観であり、関係流派や関係の深い武芸者にこそ影響を与え、受け継がれていくものの、一概に、武芸に携わることが前提としてあった当時の武士階級や武家社会全体に及ぶものであったと言いはし難い。

(2) 近世の武芸研究を進める場合、個々の武芸流派や名人・達人の個人的武芸観や武芸思想について論じてみても、その達人の流派内や関連流派に与える影響は大きくとも、当時の武芸界全体や近世という武家社会、全国の武士階級に多大な影響を直接的に与えたとは言えないであろう。むしろ、武士階級を頂点とする軍事国家であった前提に立てば、当時の政治を主導する時の権力者が、どのような武芸実践を通して、どのような思想に至り、どのような考えをもって世の中を統治し、社会(武芸界を含む)に対してどのような影響を及ぼしていったのかを明らかにしなければならぬという着想に至った。

2. 研究の目的

(1) 戦国時代に戦闘術として大いに活用されてきた武術は、徳川家康の天下統一によって、その大きな役割は終わり、武士階級にとって必要不可欠なものとして位置付けられながらも、戦乱のない安定的な社会に相応しい新たな意義の模索と位置付けがなされる必要が出てきた。このような意味で、武術が大きく変容する必要があった近世初期に、自ら戦場で実績を上げ、徳川政権が確立してからは、幕府の要職に就いた柳生但馬守宗矩の存在意義は大きい。自ら行った柳生新陰流を実戦における闘争手段から、将軍が世を治めていく上で身に付けるべき将軍学としての武芸へと発展させ、武士階級の存在理由を裏打ちするもの、また処世術の役割を果たすものとして、当時の流派や社会に多くの影響を及ぼし、特に武士の上流階級に受け入れられていったからである。この徳川政権という新しい時代に求められた武芸が、どのような形で継承され、為政者に重用されていったのかという視点で近世武芸について明らかにしていく。

(2) 柳生但馬守宗矩のように武芸者が徳川幕府の中枢にあって、政治的な手腕を発揮しながら武芸界全体に影響を及ぼした武術家や武芸家は少ない。そして、これまでの武道

学・武道論の研究分野において、武芸に達しながら当時の日本全体の社会に影響を及ぼし、幕府の政策に関与するような人物を取り上げて進められた研究は、柳生但馬守宗矩以外には、ほとんど見られない。

また、近世の為政者という視点からみた研究についても、その多くは個々のとった政策全般について言及するものであり、権力者の武芸実践や武芸思想からアプローチする方法で、近世社会の思想的・思想的的研究、及び武芸思想について言及する研究は、ほとんどなされてこなかったといっても過言ではない。

このように、これまで意外と触れられてこなかった将軍や幕閣、また、転封がほとんどなく、近世を通じて一国を領した大名などの為政者が行った武芸実践やそこで培われた武芸思想、またそれに基づいた武芸政策などを明らかにしていくことで、現代武道の基となった江戸時代の武芸発展の様子や265年にわたる徳川政権において、武芸にどのような役割を担わせ、為政者がどのような点で必要としていたのかなどについて明らかにしていくことを主な目的とした。

(3) 近世武家社会、徳川政権において、一つの重要な視点は、「家」「血統」である。武芸は個人的な能力の開発に資する部分も大きい。技能の継承に関わるいくつかの要素も重要である。特に、家伝の武芸や御家流といった武芸流派は、その藩の治政を行う上で様々な影響が引き継がれていく場面となっていることが窺え、これら藩や家において継承される部分を明らかにしていくことによって、近世武芸の様相を明らかにしていく。

3. 研究の方法

基本的な研究方法としては、徳川幕府や藩主として政治的に手腕を発揮した人物に関する先行研究について刊本、雑誌論文などにあたり、武芸実践や武芸関係の事績、武芸政策などについて資料調査の対象となるカリスタアップする。文献学的に研究を進めるために、図書館、資料館をはじめ、一次史料となる古文書、並びに関係史料の発掘、蒐集、解読、分析、整理を主な研究手法とする。

(1) 徳川将軍家は、7代将軍徳川家継で宗家の血筋が絶え、8代将軍は、御三家の紀州家から徳川吉宗が入った。よって、7代将軍までの将軍、幕閣の行った武芸の様子や武芸政策に関する史料調査、文献収集と8代将軍徳川吉宗以降の将軍、幕閣、転封のほとんどなかった藩主の行った武芸に関する史料蒐集に大きく分類し、近世の武芸の様相や実践者の武芸観、武芸思想などについて明らかにしていく。

(2) 特に、徳川吉宗の血統を受け継ぐ将軍の武芸に関する記載、実践の記述、関係流派についてあたるとともに、吉宗と血縁にあり

ながら、将軍家を出て他家に養子として入り、藩主として幕政に關与した人物の武芸実践の様子などについて、史料蒐集を行い、文献学的に研究を進める。

(3) 藩主の家における武芸の継承（御家流）に受け継がれた武芸思想の窺える史料から、武芸政策や為政者としての政治哲学に關連する内容について、文献学的に研究を進める。

(4) 為政者の個人的な立場からの武芸思想と政治家としての軍事力を意識した武芸観、武士階級としての立場からの武芸思想などについて、分析していくことで、均質的・平面的に捉えられがちである近世武芸について、様々な要素を立体的に検証していくことで、徳川 265 年の武芸の諸相や武芸に深く関わった権力者の影響、武芸や武芸界の変遷・発展の過程を明らかにしていくことを試みる。

4. 研究成果

(1) 徳川政権の前半は、徳川幕府の確立期にあたり、戦場における実用性を重視した武術と、新しい時代の要請に応えた新しい武芸の共存が見られた。これは、新しい時代の期待に応えた柳生新陰流で武芸を研究した茨木専斎俊房が後に創始した起倒流の発展の中にその特徴が見られる。起倒流の成立当初のような戦場の錯組討ちを想定した総合武術的技術体系を継承していった系統は、伝承が途絶えており、流派の発展の中で柔術流派として技法体系が専門化、高度化していく系統は新しい技法が洗練されていく様子が見て取れ、近世後期には、幕閣に列する大名が修行したことも明らかにすることができた。一般的には、当時の藩主や幕閣は武士階級の最上級クラスであり、弓馬剣槍、特に剣を表芸としているとイメージされがちであるが、近世後期には、藩主が砲術を研究したり、柔術や捕縛術を修練したりする様子が確認できた。流派の体系と修行の過程において、高度な技の修得を通じて、天地万物の理に適った技法を感得することが、実際のこの世の全てのことを処していくこと、つまり、社会を修め、世を処していくことに通じるという思想が窺え、武芸実践においては、この点を重視している様子が窺えた。

(2) 近世後期から幕末期には、すでに西洋の軍備についても知識があり、軍事力としての成果を武芸に期待しているとは、一概に言えなかった。白兵戦においては、武芸による戦闘能力が期待できる部分があるが、遠隔からの砲撃や射撃などを主な戦闘の方法となる幕末期の戦闘に対しては、武芸を積極的に導入することで、国内外、および藩内の軍事的備えとする考えは、有効性は高くなかったと考えられる。

(3) 幕末期、外圧の影響から、幕府は武芸流派を超えて剣術、砲術、槍術の実力者を集めて講武所を設立した。西洋の軍事力に対抗し、備えるためであるが、練兵や銃砲術に重きを置いた奨励ともいえるが、柔術、弓術など西洋軍事力に対抗するためというよりは、武士階級の修練やエリート養成を目的とした総合的な武術演習場的な意味合いが強いと見られる。特に、当時の為政者である老中阿部伊勢守正弘や徳川斉昭（水戸）など幕府の中樞に影響力をもった人物の武芸に期待するところは、軍事力強化以上に、武芸修練を通じて涵養されるところの為政者の養成もまた狙いとしていたと見られる。

(4) 為政者としての自覚を顕著に持ち、武芸の修練を通して、聖賢の道の実現に邁進した人物の代表が松平定信である。7代で絶えた徳川宗家を継いだ8代将軍を祖父に持ち、将軍家の身内である御三卿筆頭の田安家で生まれ育ち、幼少より、将軍家の身内として為政者のトップの自覚を持ちながら成長してきた経緯がある。御三家の紀州家で徳川吉宗が修得してきた武芸流派は、田安宗武に受け継がれ、田安家の養育の中で、同流の師範や高弟によって松平定信の武芸教育に引き継がれた。この為政者トップの自覚と武芸修練のプロセスから、久松松平家に養子として入ってからは、藩祖の創設した甲乙流を再興し、また、自ら傾倒して免許皆伝を得、生涯に渡って修行した鈴木清兵衛邦教の起倒流柔道との間に共通の真意を見出し、新たな甲乙流を御家流として自ら子弟や昵懇の関係者に指導するなど、為政者の武芸実践と軍事力強化以外の天地万物の理に適った聖賢の道を実現するための方策として行われたことが窺える。

(5) 久松松平家の本家筋である伊予松山藩の久松松平家では、松平定信の領した白河藩、桑名藩の久松松平家のような藩主による武芸思想は見られなかった。一方で、松平定信の子弟で直接武芸教育を受けた桑名藩主・松平定永や松代藩主・真田幸貫は、この武芸思想を継承した様子が見られ、高度な武芸実践が武家社会における為政者としての聖賢の道の実現に不可欠である認識が受け継がれている。真田幸貫は、外様の真田家の8代藩主となるが、老中に抜擢されている。また、桑名藩主・松平定永の八男で備中松山藩の板倉家に入った板倉勝静（定信の孫）も幕末最後の老中筆頭として、幕末の混乱期に為政者としての手腕を発揮している。

(6) 近世後期という新たな幕藩体制の在り方が問われる時代に、実戦に有効な武器、武芸の開発が行われる一方、高度な技術追求に裏付けられた武芸実践を新たな武芸の価値として見だし、藩や幕府という武士階級の中に新たな実践哲学を導入しようとする動

きが見られることを明らかにすることができた。徳川吉宗につながる武士階級、社会の政治主導者としての自覚とその具体的な実現方法としての武芸実践 = 聖賢の道 = 高度な技の修得と発現という関係が見て取れた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計1件)

菊本 智之「近世為政者の武芸実践と武芸研究に関する一考察 ~松代藩主 真田幸貫の武芸研究を中心に~」浜松大学、健康プロデュース雑誌、査読有、第6巻第1号、2012、127-137

[学会発表](計3件)

菊本 智之「近世中期の柔術流派における剣術研究に関する一考察 ~松代藩関係史料の起倒流伝書を中心に~」スポーツ史学会 30周年記念大会、2016.12.4. (於：立命館大学)

菊本 智之「甲乙流関係史料にみる為政者の武芸実践と政治思想に関する一考察」日本武道学会 第49回大会、2016.9.8. (於：皇學館大学)

菊本 智之「老中 真田幸貫にみる為政者の武芸研究の視点と武芸観」日本武道学会 第44回大会、2011.9.1. (於：国際武道大学)

[その他]

杉江 正敏、榎本 鐘司、太田 順康、大坪 壽、木原 資裕、境 英俊、村山 勤治、湯浅 晃、菊本 智之「福岡県剣術資料報告 ~久留米藩 剣術師範 加藤田平八郎関係史料~」全日本剣道連盟、2014

杉江 正敏、榎本 鐘司、太田 順康、大坪 壽、木原 資裕、境 英俊、湯浅 晃、菊本 智之「静岡県剣術資料報告 ~明治・大正期の同県剣道人物史と牧之原開拓土族の検討~」全日本剣道連盟、2012

6. 研究組織

(1)研究代表者

菊本 智之 (KIKUMOTO, Tomoyuki)
常葉大学・健康プロデュース学部・教授
研究者番号：70267847